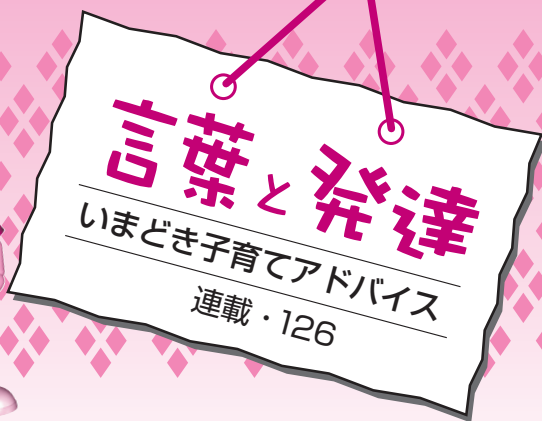




就学という 大きなハードル

その4

就学と転学 うまく行かなかった場合も



言語聴覚士 中川信子

小学校から子どもの能力に合わせて
固定制の学級を選べば順風満帆か……
そうとばかりもいえないというのが次
のGさんの例です。

小学校から固定級を選んだ ものの試練が続いたGさん

Gさんは20代。色白で、モデルのよう
にすらりとした姿、町を歩くと声を
かけられるといいます。ぼんやりした
甘えたような話し方。「いい男はいない
かな」「もつときれいになりたいな」が
口ぐせです。

健診時、発達の遅さを指摘され、迷
うことなく療育機関に通いました。就
学は、市内の固定級、A学級とB学級
を見学しました。Gさんの学区は本来
A学級だったのですが、B学級のベテ
ランの先生の指導がとても気に入った
ので教育委員会と交渉して、B学級へ
の就学を希望して認められました。

ところが……入学式に行ってみると、ベテラン先生は異動。経験3年目の先生と、昨年まで通常学級にいた男の先生が担任でした。なんでも、6年生が卒業し、クラスの人数が減ったため3人体制だった教員が2人体制になり、ベテラン先生が異動せざるをえなかったとの事情だとか。

さあ、困りました。経験3年目の先生の方が、障害についての理解は幾分進んでいるというものの、新しく来た先生のほうが年上で、校内での発言力も大きくて、クラス運営はその先生の主導権のもとに行われるようになりました。

その先生ははっきり言って体育会系。子どもの気持ちに寄り添って、こまかな配慮をするのではなく、大声で号令をかけ「俺について来い！」型の指導。「ついて来い！」だけならいいのだけど、ついて行かない、行けない子に

「なぜ来ないかあー」と怒声の嵐。もともとおとなしくて引つ込み思案だったGちゃんはたちまち登校をしづるようになりました。

そのことを校長先生に言っても、「クラスの指導方針は、担任に任せてあります。保護者一人ずつの意見を取り入れていたらクラス運営はできません。ご意見があったことだけは、伝えておきます」と木で鼻をくくったような返事。まあね、そりゃ確かにね。

校長の言うとおり、子どもにしっかりと寄り添いながらのクラスづくりをしてきた昨年までのベテラン担任に対して「生ぬるい。もっとビシバシひっぱっていつてほしい」という保護者の声があったのも事実です。

それでも子どもは偉いですね。もう一人の先生のじょうずなフォローもあり、だんだん担任の大声にも慣れっこになってきて、学校を嫌がらなくなり、



学習面でも進歩が見られるようになりました。おうちでは「言い聞かせれば分かる」という方針でずっとやってきたのですが、ここへきて「大きな声や

怖い声で言わないと聞かない」という行動も。タフになったのね。

そして5年生に上がった年、大声先生は異動、持ち上がりの先生は妊娠でお休みに入り、全く違うふんわり型の先生2人に交代しました。今度の先生方は、障害のある子との経験はそれなりにあったとのこと。

ところがそのクラスに、障害が重く、多動の激しい子が就学時に勧められた特別支援学校ではなく固定級を希望して、しかも2人同時に入ってきたのです。介助員もつきましたがトラブル続出。けがする子が出ないよう、脱走する子を追いかけて、経験のある先生もてんでこ舞い。クラスのまとまりづくりにどころではなくってしまいました。

厳しい先生に鍛えられたのはよいけれど……

落ち着かないクラス、充実感のない

毎日。ちょうどそのころ、家族に病人が出て、お母さんの目が離れたことも、理由の一つだったのかもしれない。Gちゃんは洋服に興味を持ち始めました。お母さんの見たことのないTシャツやスカートをはいっているGちゃんにお母さんは驚きました。小さいころから台所の仕事や買い物を意識的に教えていたかいてあって、自分ひとりでも買いに行くことができたのです。「裏目に出ちゃいました」とお母さんは苦笑い。

留守の間に財布からそーっとお金を抜いていた日もあったそうです。問い詰められても知らん顔のGちゃん。悪いことをしているという意識はないのです。きびしく叱ってもどこ吹く風。「大声先生に鍛えられて、ちょっとやそつとじゃ泣かずにすむようになったのはよかったんですけど、『言って聞かせれば分かる』が通じなくなっちゃって。

難しいですねえ」とお母さん。

中学に進学して、安定したクラスとベテラン先生にめぐり合い、また、養護学校高等部でも大人としての自覚をしっかりと教えられて、やっと「持ち直した」そうです。

「無理させずに」と作業所を選びましたが、「いい男がいらない」のが不満のタネで、たまに来る若い男性指導員に興味があります。お母さんの心配は尽きません……。お母さんはどんなときも前向きで、問題解決志向でことに当たってきました。お母さん個人の努力にゆだねられる状態を改善していかなくては、いつも思います。

成人期を迎えて深刻な状態になっっている人も少なくありません

この稿では「就学について」考えていたのに、結局、卒業後に60年もある

人生をバランスよく過ごせるような人間としての成長を保障するにはどうしたらいいか、という話になってきてしまいました……。

そして、現在、深刻な状態に陥っているお子さんたちの例も書いておかなければなりません。そこから幼児期に必要なことが見えてくるからです。

現在、私が知る範囲で「深刻な状態に陥っている」お子さんたちとは20代ないし30代の方たちです。いったん就労したものの離職して在宅、ひきこもり、退行、家庭内暴力、無気力、昼夜逆転の生活に陥っている人たちの多さに驚きます。障害種別ごとの親の会でも、このところ深刻な話題になっていると聞きます。

「深刻な状態」に陥った原因が、学校生活にあるのかそれ以外の要因もあるのか、きちんと検証することはできません。ただ、時代に共通する流れは確

かにあると思えます。

障害のある子どもにも教育を！と国民的運動が高まり、全員就学が実現したのが昭和54年です。どんなに障害が重くても、就学猶予・就学免除されることなく、養護学校（現・特別支援学校）に全員入れることになったのです。

また、インテグレーションの理念のもと、通常学級での教育を求める運動が全国的に高まり、「みんなと一緒にの教育」がさかんでした。今20代後半から30代前半の人たちはそういう時代に保育園や幼稚園での統合保育、学校では通常学級での教育をくぐった人たちが多いのです。



一般企業に就労したものの ひきこもっているHくん

ダウン症のH君は29歳です。お母さんは熱心に親の会活動、障害者運動に参加しました。これはと見込んだ幼稚

園に日参し、障害児として初めて入園しました。ニコニコ温和な性格で、周囲にも溶け込み、楽しい園生活だったようです。

就学相談時の発達検査では、IQ 50前後、通常学級は難しいだろうと固定制の学級を勧められましたが、お母さんが強く主張し、通常学級に入ることになりました。教育委員会には「教員数も限られているので、お子さんだけ特別なことはしてあげられませんが、それでもいいですか？」と念を押されましたが、「はい、結構です。みんなの中にいることが大事です、勉強は分かってなくてもかまいません」と型どおりの返事をしたそうです。

学年の進捗とともに勉強はついて行けなくなりますが、イジメもなくクラスの人々とはよい関係が築けていたようでした。よい関係といっても対等な仲間ではなかったのでしょうか。

中学進学にあたって、お母さんは悩みました。能力面でついていけないことは明らかからです。決め手はクラスの子たちが書いてくれた「Hくんと一緒に中学に行きたい」との一文を文集に見つけたこと。たとえばが子に負担がかかっても、障害児の存在を周囲の子どもたちの心にしつかり刻み込みたい、と地域の中学に進みました。小学校時代から授業中は絵を描いて時間をつぶすことが習慣になっていたためか、特段のトラブルもなく、ニコニコと3年間過ごしました。

高校受験はさすがに無理とあきらめて養護学校（当時）高等部に進みました。笑顔のかわいい温和なHくんの姿は健在で、高等部でも模範生でした。お母さんと学校の職場開拓の努力が実って一般企業に就労しました。食品加工の単純作業、作業能率は劣るもののがんばって働きました。職場の人た

ちも理解があり、楽しい職場と見えたのに、二年目の後半から次第に笑顔が消え、朝起きられない、お腹が痛いと言いつつ遅刻が始まり、ついに職場に行かなくなりしました。「もうやめよう、おうちでゆっくりしよう」とお母さんが言っても「イヤだ、やめたくない」と強くなり、言い張ったようですが、見かねたお母さんが退職させました。

その後、Hくんは、奇声を上げる、激しい自傷、昼夜逆転、といった時期を経て、今は少し落ち着いてひきこもりの状態になっているとのこと。

温和で素直で、親に反抗することもなく来た子どもが20歳過ぎて思春期を迎え、アイデンティティの確立という課題の前で立ちすくみ、荒れずにはいられない。特に知的な障害があると、自分の気持ちをこぼすことで表現できない分、自傷行為や攻撃的行動に出ざるを得ないようにも思えます。

『みんなと一緒に』を旗印にずっと走って来ましたが、常に自分はみんなと同じにはなれない、って感じさせてしまったのかもしれない。みんなと一緒にいても《仲間》じゃなかったのかな、と思います。高等部を出たばかりのお子さんを見ても、仲間と一緒にいて、理解ある支援者のいる場所で過ごしているお子さんたちはみんな元気です。それから。これからゆっくり育て直しをしようと思っています」とお母さんは達観した感じの笑顔でした。

私を知っていたり、話を見聞きしたりする親御さんは、何があっても親が子をしっかりと見ていこうという方たちに限られます。実際の学校や地域にはこんな「きれいなこと」ではすまないような事例もたくさんあります。切ないですね。